



art trip vol.03

in number,
new world /

四海の数

2019年12月7日(土) ~
2020年2月9日(日)

会 期	2019年12月7日(土) - 2020年2月9日(日)
開館時間	午前10時 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)
会 場	芦屋市立美術博物館 エントランスホール、第1展示室、第2展示室
休 館 日	月曜日(但し、1/13は開館、1/14は休館)、年末年始(12/28-1/4)
観 覧 料	一般 700(560)円、大高生 500(400)円、中学生以下無料 <small>※同時開催「昔の暮らし」展の観覧料も含む</small> <small>※()内は20名以上の団体料金</small> <small>※高齢者(65歳以上)および身体障がい者手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方ならびにその介護の方は各当日料金の半額になります。</small> <small>○観覧料無料の日: 12月25日(水)、2020年1月13日(月・祝)</small>

主 催	芦屋市立美術博物館
後 援	兵庫県、兵庫県教育委員会、公益財団法人兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社、NHK 神戸放送局、KissFM
協 力	ARTCOURT Gallery、OTA FINE ARTS、TARO NASU、Yumiko Chiba Associates

お問 合 せ	担当学芸員: 大槻 晃実 TEL: 0797-23-2666(学芸直通) <small>【画像貸出など広報について】 総務課 TEL: 0797-38-5432(代表)</small> 芦屋市立美術博物館 〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25 <small>◇ホームページ: http://ashiya-museum.jp/</small>
--------	--

PRESS RELEASE

開催趣旨

かつて、多くの哲学者は「数とは何か」と議論を交わしました。時間や距離、人口、気温、貨幣、年齢、身長、体重、心拍数など、世界を構成する事象は数字で表されており、私たちは数に囲まれて生きています。

具体美術協会で活動後、70年代より写真や映像といったメディアを素材として「時間」について思考させる作品も生み出している今井祝雄、空間の特性を読み、音や光、影といった非物質的な現象を用いたインスタレーション作品を展開する久門剛史、映像の特性にもとづき空間演出とパフォーマーとの共同作業により制作を行なう津田道子、その土地の史実や文化の在りようを集め、自身の手により思索した造形物を通して、目に見えないつながりを解きほぐし顕在化する中村裕太。

豊かに生きるために確かめながら暮らす日々の中、数は物事を考える上で中心的な役割をはたしています。しかし、相互認識のために共通言語として使用される数字は、価値基準が一致しなければ言語として成立しづらい繊細な性質も持っています。一方、数字に主導権を握られ、したたかな性格を持つものとして接する機会も少なくありません。常に寄り添う数字とどのように生きていくのか。

本展では、今井祝雄、久門剛史、津田道子、中村裕太の作品とともに芦屋市立美術博物館の所蔵作品を通して、「数」について意識を深めていきます。

展覧会の特徴

「art trip」シリーズは、当館コレクション作品とともに現代美術作品を紹介する展覧会です。シリーズ第3弾にして最終章となる本展は、「数」をテーマに展開します。

この度、国内外のアート・シーンで活躍する今井祝雄、久門剛史、津田道子、中村裕太の4名を招き、自身の作品と共に展示する作品を当館コレクションの中から選定していただきました。彼らが選んだ作家は次のとおりです。

今井祝雄×田中敦子、関根美夫

久門剛史×田中敦子

津田道子×菅井汲 他

中村裕太×長谷川三郎

数は物事を考える上で中心的な役割をはたしています。加えて、ものを数えるという行為は地球上の生物のなかで人間だけがもつ特徴といわれています。

私たちの暮らしの中で密接に関係する数字は、近い存在であるあまり、数そのものについて、感じる、そして考える機会は少ないのではないのでしょうか。

「数」というテーマをもとに招待した作家4名の作品と、彼らが選定した当館コレクション作品とを併せて展覧することで、「数」について意識を深めていただく場の現出を試みます。

会期中、さまざまなイベントを予定

オープン初日には、出品作家4名が自作を前にアーティストトークを行います。また、12月には久門剛史と林寿美(インディペンデントキュレーター)、今井祝雄と浅沼敬子(北海道大学大学院准教授・芸術学)といった、作家とゆかりのあるキュレーター・研究者と対話を深める場のほか、1月は津田道子のソロトークや、中村裕太と服部正(甲南大学教授)による長谷川三郎の軌跡を追うツアーを予定しています。彼らの活動や作品について深く知る機会になるとともに、「数」について思考する時間となれば幸いです。

PRESS RELEASE

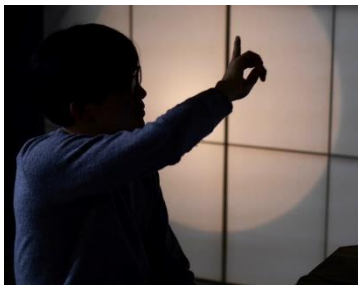
出品作家

今井 祝雄 Norio Imai



1946年大阪府生まれ。大阪府在住。高校在学中から吉原治良に師事し、64年に17歳で参加した具体美術協会で発表を重ねた。主にレリーフ状の白のオブジェの制作を繰り返して、72年の解散まで全展に出品。その後、写真やビデオを取り入れた活動とともに、80年以降はパブリックアートも手がけ、新大阪駅前、関西文化学術研究都市、京阪本駅ほか彫刻、モニュメントを制作。近年の主な個展に、「行為する映像」(2019、アートコートギャラリー、大阪)、「物質的恍惚」(2018、Axel Vervoordt Gallery、アントワープ)、「白のイベント × 映像・1966-2016」(2016、Yumiko Chiba Associates viewing room shinjuku、東京)、「Norio IMAI, (Part I) Shadow of Memory / (Part II) White Event」(2015、Galerie Richard Paris、パリ)、「Perspective in White」(2014、Galerie Richard NY、ニューヨーク)、「フレームの彼方」(2012、ギャラリーバルク、京都)など多数。

久門 剛史 Tsuyoshi Hisakado



1981年、京都府生まれ。京都府在住。様々な現象や歴史を採取し、音や光、立体を用いて個々の記憶や物語と再会させる劇場的空間を創出する。近年の主な展覧会に、個展「MoCA Pavilion Special Project Tsuyoshi Hisakado」(上海当代芸術館、2016)、「あいちりエンナーレ 2016」MAM プロジェクト 025: アピチャッポン・ウィーラセタクン+久門剛史」(森美術館、2018)。現在、アピチャッポン・ウィーラセタクンとの共作が、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展「May You Live in Interesting Times」(2019)で展示中。2020年3月には豊田市美術館で国内初の大規模な個展を開催予定。

2016年には世界各国で上演されたチェルフィッチュ『部屋に流れる時間の旅』の舞台美術を担当した。近年の主な受賞に「日産アートアワード 2015」オーディエンス賞、「平成 27 年度京都市芸術文化特別奨励者」、「VOCA 展 2016」VOCA 賞、「メルセデス・ベンツ アート・スコープ 2018-2020」などがある。

津田 道子 Michiko Tsuda



1980年 神奈川県生まれ。神奈川県にて制作、活動中。2013年 東京芸術大学大学院映像研究科博士課程修了。(博士:映像メディア学)工学部出身という経歴を持つ津田道子は、一貫して映像原理の論理的な探求をテーマとして、映像、インスタレーション、パフォーマンス作品を制作している。カメラや鏡といった人間の視覚に関わる媒体の特性を、計算された映像空間の演出によって顕在化させ、人間の視覚や空間認知に揺さぶりをかける津田の作品は、独特な空間的広がりと豊かさを備えている。近年は、神村恵とのユニット「乳歯」としてパフォーマンスも行う。主な個展に「Observing Forest」(zarya 現代美術センター/ウラジオストク、2017)、「The Day After Yesterday」(TARO NASU/東京、2015)など。参加した主な展覧会に「六本木クロッシング 2019 展: つないでみる」(森美術館/東京、2019)、「あいちりエンナーレ 2019 情の時代」などがある。2019年アジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)のグランティ。

中村 裕太 Yuta Nakamura



1983年東京都生まれ、京都市在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士(芸術)。「民俗と建築にまつわる工芸」という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「MAMリサーチ 007: 走泥社-現代陶芸のはじまりに」(森美術館、2019年)、「日本ラインの石、岐阜チヨウの道」(美濃加茂市民ミュージアム、2018年)、「柳まつり小柳まつり」(ギャラリー小柳、2017年)、「あいちりエンナーレ」(愛知県美術館、2016年)、「第20回シドニー・ビエンナーレ」(キャレッジワークス、2016年)、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(クイーンズランド・アートギャラリー、2015年)、「六本木クロッシング 2013: アウト・オブ・ダウトー来たるべき風景のために」(森美術館、2013年)。著書に『アウト・オブ・民藝』(共著、誠光社、2019年)。

PRESS RELEASE

関連イベント

※(5)以外は申込不要。直接会場へお越しください。詳しくは当館 HP をご覧ください。

12月7日(土)
15:00-17:00

(1) オープニングイベント アーティストによるギャラリートーク

講 師:今井祝雄、久門剛史、津田道子、中村裕太(本展出品作家)

会 場:展示室

参加費無料(ただし要観覧券)

12月14日(土)
14:00-15:30

(2) トーク I

講 師:久門剛史(美術家)、林寿美(インディペンデントキュレーター)

会 場:講義室

定 員:80名

参加費無料(ただし要観覧券)

12月21日(土)
14:00-16:00

(3) トーク II 「接触のエロティシズム」

講 師:今井祝雄(美術家)、浅沼敬子(北海道大学大学院准教授・芸術学)

会 場:講義室

定 員:80名

参加費無料(ただし要観覧券)

2020年
1月13日
(月・祝)
14:00-16:00

(4) トーク III

講 師:津田道子

会 場:講義室

定 員:80名

参加費無料

1月25日(土)
13:00-16:00

(5) ツアーターク「長谷川三郎の軌跡を追って」

講 師:中村裕太(美術家)、服部正(甲南大学准教授)

会 場:芦屋市立美術博物館、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー

定 員:20名 ***要事前申込** ※1月10日(金)締切。*応募者多数の場合は抽選

申込方法:氏名・住所・電話番号を電話(0797-38-5432)か Eメール(ashiya-bihaku@shopro.co.jp)にてお伝えください。

参加費無料(ただし要観覧券) *要交通費

1月12日(日)
2月2日(日)
両日とも14:00-
*1時間程度

(6) 担当学芸員によるギャラリー・トーク

会 場:展示室

参加費無料(ただし要観覧券)

PRESS RELEASE

作品



1



2

本展の画像データをプレス掲載用にご用意しております。ご希望の際は別紙(申込用紙)にご記入のうえ当館までご連絡ください。

1 | 今井祝雄

《F氏との1時間》1979年

ゼラチンシルバー・プリント

© Norio Imai

Courtesy of Yumiko Chiba Associates

2 | 今井祝雄

《10時5分》1972年

ブラウン管にスクリーンプリント

Photo: Nobutada Omote

Courtesy of ARTCOURT Gallery



3



4

3 | 久門剛史

《crossfades》2013年 —

紙、アルミニウム、ルーペ、真鍮、ムーブメント、他

Photo: Artist *参考画像



5



6

4 | 久門剛史

《Pause》2016年

サウンド、スポットライト、電球、木材、アクリル、鏡、アルミ、ジョーゼット、ムーブメント、他

Photo: Tetsuo Ito *参考画像

5 | 6 | 津田道子

《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》2016年

Photo: Tadasu Yamamoto



7



8

7 | 中村裕太

《日本陶片地図 | 埼玉県川越市久下戸》2016年

Photo: Nobutada Omote *参考画像

8 | 中村裕太

《日本ラインの石》2018年

Photo: Nobutada Omote *参考画像

【広報用画像の使用について】

※写真データの使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。※広報用画像の掲載の際は、各画像のキャプションとクレジットを明記してください。

※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶらないよう、レイアウトにご配慮ください。

以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。

art trip vol.03 in number,
new world / 四海の数

FAX 連絡先
(0797)38-5434

ご希望の写真番号に○をつけてご返送をお願いいたします。本展をご掲載いただける場合、読者・視聴者プレゼント用招待券(10組20名様まで)もご用意しておりますので、お気軽にご連絡ください。

番号	作家名・作品名・制作年・素材・所蔵元など	
1	今井祝雄	《F氏との1時間》1979年 ゼラチンシルバー・プリント © Norio Imai Courtesy of Yumiko Chiba Associates
2	今井祝雄	《10時5分》1972年 ブラウン管にスクリーンプリント Photo: Nobutada Omote Courtesy of ARTCOURT Gallery
3	久門剛史	《crossfades》2013年- 紙、アルミニウム、ルーペ、真鍮、ムーブメント、他 Photo: Artist *参考画像
4	久門剛史	《Pause》2016年 サウンド、スポットライト、電球、木材、アクリル、鏡、アルミ、ジョーゼット、ムーブメント、他 Photo: Tetsuo Ito *参考画像
5	津田道子	《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》2016年 Photo: Tadasu Yamamoto
6		
7	中村裕太	《日本陶片地図 埼玉県川越市久下戸》2016年 Photo: Nobutada Omote *参考画像
8	中村裕太	《日本ラインの石》2018年 Photo: Nobutada Omote *参考画像

貴社名	
媒体名	(新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・その他)
ご担当者名	
ご住所	〒
電話番号	TEL FAX
メールアドレス	@
URL	
掲載・放送予定日	
写真到着希望日	
招待券希望枚数	組 名分希望

本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体(VTR/DVD)などを当館までお送りくださいますようお願い申し上げます。